昭和医科大学学士会後援セミナー

# 在宅医療における「食べる」を支えるために

金沢　英哲　先生
Swallowish Clinic　院長

主催：昭和医科大学歯学部口腔衛生学講座
2026 年 7 月 16 日　18：00～19：00，昭和医科大学 1 号館 5 階カンファレンスルーム
および Web セミナー（ZOOM）

接食嚥下機能評価の結果「食べられない（食べさせない）」と判断されあとは死を待つのみと宣告された患者は未だ数多く存在し、転院・退院後という医学的な状態や環境が変わってもその判断がそのまま引き継がれてきた事案も散見される。VE や VF に基づく単焦点的な機能評価だけでは、誤謬がつきものである。認知症を有する方や小児など、検査の意義を理解したり協力的に受けられない患者に対して、身体や頭部を抑えつけながら評価が行われることもあると聞く。機能評価に終始せず、むしろ「食支援技術」の向上・啓発と、それを継続できる「環境整備」の拡充が不可欠となる。しかし、限られた人員・医療介護報酬資源のなか、臨床現場努力には限界があり、疲弊もみられ、諦観ともいえる慣習化された医療者側の対応は、患者にとっては冷酷な対応に映るだろう。

医療機関で嚥下機能評価の手法と手続きにより「この姿勢で、この食形態のみ、この食べ方でなら食べて良い」と判断され、医療機関側には「お楽しみとして食べられている」と認識されるプロセスは、患者側には「食べたいものは一切食べさせてもらえず、苦痛と屈辱を感じている」場合もある。

医療者は患者の安全を第一に、患者が少しでも口から食べられるようにと善意に基づく判断と対応であったとしても、結果的に患者側とズレた認識は、患者にとって満足度は低く幸せを感じられないし、医療者も達成感を感じられずモヤモヤとするだろう。この体験価値のギャップにはどんな要素があるだろうか。

このような状況に陥っていたとしても、1）そもそも医療者はその倫理的ジレンマに気づきにくい。また、2）気づけたとしても忙しい臨床のなかで論点を整理して解決方法まで導く方法を知らない、3）解決するための方策は浮かんでも、医療チームの調和を乱す恐れを懸念して自らの行動を差し控えてしまう、といった課題が浮上する。

本講演では、患者の自律 Autonomy をキーワードに掲げ、患者の自律を支えるスキルの幾つかを概説し、前述の倫理的ジレンマとの関連を考察する。そして、その実践において生じる倫理的ジレンマ Ethical dilemmas とその対応について概説する。このような臨床倫理を実践していくなかで、なおも潜在する落とし穴 Pitfalls についても触れ、聴講者の経験されてきた臨床に照らし気づきと内省が生まれ、皆さまそれぞれの再出発への一助になれば幸いである。